

翻訳

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(目)

Parvus, Der Weltmarkt und die Agrarkrisis, Neue Zeit, 1995-96

大藪輝雄
鈴木敏正 共訳

目次

- 一、はじめに
- 二、イギリスとヨーロッパ
- 三、世界市場におけるドイツの地位
- 四、都市と鉄道
- 五、農業の矛盾(以上第二十三卷・第三号)
- 六、工業と農業(本号)
 - A 工業の発展が穀物価格に及ぼす影響
 - B 工業の発展が地代・借地料および地価に及ぼす影響
- 七、資本主義的農業恐慌の一般的説明(次号)
 - A 地代の理論
 - B 恐慌
- 八、工業生産物市場と穀物市場(次号)
- 九、ユンカーの幸福と不幸(以下第二十三卷・第四号)
- 十、ロシアとアメリカの競争、経済不況、「農業の困難」

本稿は「目次」に注記したように、すでに「立命館経済学」第二十三卷・第三号および第二十三卷・第四号に第一～五節と第九～十節を記載したバルヴスの論文「世界市場と農業恐慌」の、当時省略した第六～八節を追加的に訳出したものである。当初は紙面の都合上、省略するつもりであったが、この部分の理論的重要性の故に追加的に記載させていただいた。節の順序が前後したことに対して、読者の御諒恕を得たい。

六 工業と農業

工業の發展と資本主義的農業の間の一般的な諸關係を明らかにすることがとりわけ重要である。カール・マルクスの『資本論』第三巻が出版されて以来、これにはもはや大きな困難はない。

A 工業の發展が穀物価格に及ぼす影響

穀物価格は、同じ耕作面積・同じ人口をして同じ穀物生産の下でも——工業さえ發展すれば——上昇しうる。

われわれは、まず初めに、この命題を一つの抽象事例で説明しよう。

われわれは工業および農業における資本主義的生産の完全な發達を前提とする。また、この状態の下では、その国には賃労働者と資本家または地主しか存在しない。われわれは、さらに、労働者は貨幣でのみ賃金の支払いをうけると仮定しよう。これは最も簡単な場合ではなくて、逆に、証明が最もむずかしい場合である。

われわれは、この国では、農産物の輸入は全く必要としな

バルウス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

いが、社会的な生産の分化は進んでいて、農業に一〇〇万人工業に一〇〇万人の労働者が従事しているものとしよう。そして、この一〇〇万の農業労働者が、社会全体の生活維持のために必要な生活手段を生産するものとする。より簡単に概観するために、われわれは生活手段の代わりに主要食糧である穀物を取りあげる。それからさらに、われわれは、耕作面積は——数字はいつでもよいのだが——一〇〇万ヘクタールになるものとする。いまや、この国では、一般的な価値法則と地代法則にしたがって形成される一定の穀物価格が存在するであろう。

しかしながら、世界市場の發展の結果、この国の工業において労働力に対するより強い需要がおこるものと考えてみよう。そうすると、もし工業の繁榮の状態が持続するならば、農業から労働力の一部が引きぬかれねばならない。産業予備軍は事の本質を何ら変えない。なぜなら、第一に、失業の一定の状態は常に存在するからである。それは、季節労働、大規模かつ急速になされる配置換え等々のような、工業生産の内的諸関連から生じる。次に、予備軍が多く吸収されればされるほど、それだけ労賃は上昇する(それにより、相

対的な労働者不足が存在するということが認識される)。だが(第三に……記者)、農業と工業の間の労賃の通常格差を度外視する場合でさえも、工業における労賃の上昇につれて農業労働者の工場への流入がもたらされねばならない。最後に、資本主義的工業には際限なく発展するという傾向がある。したがって、もし資本主義的過剰予備軍が堆積するならば、それは世界市場の不十分な発展の証拠である。つまり、このようにして説明はできようが、ここでは、さしあたり、農業と工業の一般的な関連が問題である。ついでに言えば、この移動は予備軍の資本主義的規定をうけていることが指摘されよう。

かりに、工業労働者が一二〇万人に増大したとすれば、農業にはもう八〇万人しか残っていない。もし労働の生産力が同じままならば、この八〇万人は、以前の耕地面積一〇〇万ヘクタールを耕作できない。そうすると、資本主義的借地農と地主は「都市への行進」、すなわち、労働者不足と高い労賃を嘆くであろう(現在のプロイセンのユンカーの嘆きは、後述するように、別の原因をもっている)。そして、この国では穀物の不足が生じるであろう(われわれは純粋の資本主義を前提にしており、そこではすべての農民階層はすでに完全に没落してプロレ

タリア化していることに注意すること)。

穀物不足は輸入によって解消し得るであろう。ただ、穀物不足はすでに穀物価格の上昇を前提としており、さもなければ、なぜこの輸入がもつと以前にすでにおこっていないか。輸入によって大きく影響されうる。しかしながら、われわれは穀物の輸入を全く無視してよい。というのは、外国が資本主義的発展の異った段階にあり、したがって、これと結びつけることは、われわれの純粋資本主義的な生産という仮定が乱されるか、あるいは、同じ発展段階にはあるが、工業と農業の社会的労働の構成が異っており、したがって、われわれの事例を計算しなおす(それによって本質的には何も変化しないのだが)必要性が明白になるか、あるいは最後に、他の国がわれわれの母国と経済的に似ており、貿易的結合によって変化することは全くないか、のどちらかであるから。

あらかじめ誤解を避けるために、だからといって穀物価格は国内だけで形成されるという主張をすべきではないということにさらに言及したい。問題なのは価格形成そのものではなくて、穀物価格が上昇する、一定の場合であり、それは、は

じめによりくわしく特徴づけた。そして、⁽¹⁾何度もくり返すが、このような場合を抽象的な事例で説明しよう。

かくして、問題として残っているのは次のことだけである。すなわち、農耕を集約化して八〇万ヘクタールで以前一〇〇万ヘクタールで生産したと同じだけの穀物を供給するか、あるいは、労働の生産力が機械の導入などによって上昇して八〇万人の労働者が一〇〇万ヘクタールの土地を耕作できるようにするか、あるいはまた、当然考えられることではあるが、その両者の結合をとるか、である。こうして、もし不足している穀物の生産が、部分的にはあれ、今まで穀物価格を規定していたものよりもより大きな資本投下つまりより大きな生産費と結びついているならば、穀物価格は上昇するであろう。機械・肥料または土地改良に対する資本の増投がなされるかどうか、新しい生産方法が導入されるのか、それともこれまででは使われていなかったところに古い方法が応用されるかどうか、これらは、質的には、事態を変化させない。量的には、すなわち、価格の差違の大きさについては、時にはあるものが、時には他のものが重要になる。農耕の改良がなされる結果、それにより工業生産に対する需要が増大するの

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(三) (大藪・鈴木)

で穀物価格は、農業と工業の均衡が成立するまで上昇するということもありうる。政治経済においても、自然におけると同様に、循環作用が存在するだけである。

そこで、ここではまずはじめに、(1)人口が同じままで、(2)穀物生産は変わらず、(3)耕地面積が同じままか減少しさえするにもかかわらず、穀物価格が上昇するという一つの抽象的な場合を考える。

最初に、われわれの抽象的事例を現実に近いものために媒介項を挿入して、農業労働者は、部分的には現物で賃金の支払いをうけるものとしよう。

われわれの第一の場合(すべての賃金が貨幣で支払われる場合……訳者においてはすべての穀物は市場に出された。供給と需要は、前者においては生産された穀物量により、後者においては消費人口の総数によって形成された(もちろん、資本主義的市場においては、単に需要量だけでなく購買力も考慮される)。

社会的労働の構成を変化させた場合にもなおすべての収穫物が市場に出されたが、ただそれは当初は以前より少なかった。第二の場合には異なる。ここでは、市場にもちこまれた穀物量は、総収量から、生産者によって現物で消費された部分を

差し引いたものである。これに対して市場需要は、工業人口の需要だけである。一ヘクタール当りの収量を一トンとすれば、第一の場合においては(もし、簡單化のために、穀物需要者として労働者階級だけを計算に入れるなら)一〇〇万トンの供給が二〇〇万人の需要と直面する。しかし、第二の場合においては、五〇万トンの供給が一〇〇万人の需要と向かいあう。みられるように、量だけは異なるが、二つの場合の關係は同じ、すなわち、1:2である。⁽²⁾

穀物の価値は、農業労働者が貨幣で支払われるか生活手段で支払われるかによって影響されない。それは、借地農または地主が、穀物の生産価格を計算する場合、労働者に渡す穀物の量を収穫物で支払うか、貨幣価値で賃金計算するかせねばならないことに示されている。しかし、市場価格の形成の際には、保存される種子用穀物や家畜に支給された飼料量と同様に、労働者に現物で支払われた穀物量はほとんど考慮されない。それらは、需給双方をその額だけ減少させることによって、需給に何も影響を及ぼさない。しかし、需給が互いに市場で相対する場合には、このような現物で消費される量は問題でなくなる。それがどのように作用するかはどうでも

よいものとみなされよう。

第二の場合においては、市場需要に対する市場供給の關係は、すでに述べたように、最初の場合1:1と同じである。さて、ここでも最初と同じように、生産の諸關係に次のような変化を導入しよう。すなわち、工業の労働者階級が一二〇万人に増加し、農業のそれは八〇万人に減少するものとする。この場合には市場の狀態はどのようなのであろうか？

まず初めに、八〇万人の労働者は八〇万ヘクタールで八〇万トンの穀物しか生産しない。その中から、農業労働者は、賃金率(賃率)がかわらないものとすれば、現物賃金(wage in kind)として四〇万トンをうけとる。

市場には四〇万トンが送られるが、それは工業の増大した一二〇万人の人口の需要と相対する。市場供給の市場需要に対する關係は、後者を需要者数であらわせば、今や4:12つまり1:3となる。

生産の割合の変化を考慮に入れた際にお

穀物の供給(トン)		穀物に対する需要(需要者数)	市場での比
第一の場合 貨幣賃金で	最初に 1,000,000	2,000,000	2:4
	最後に 800,000	2,000,000	2:5
第二の場合 現物賃金で	最初に 500,000	1,000,000	2:4
	最後に 400,000	1,200,000	2:6

こつた市場関係の変化を比較可能な数量であらわそうとするならば、前頁の表のような概観を得る。

第一の場合、すなわち、貨幣賃金の場合には、市場における割合は $\frac{M_1}{M_2}$ から $\frac{M_1}{M_3}$ に変化するが、第二の場合、すなわち、現物賃金の場合には、社会的労働の構成が変移する結果、市場関係は貨幣賃金の場合よりも供給の方がより有利になる。理由は明白である。貨幣賃金の場合には市場において供給だけが減少し、一方、市場での需要は、(それは総人口によってあらわされるのであるから)変化しない。しかしながら、現物賃金の場合には、供給が減少するだけでなく、同時に、市場における需要が増大する。なぜなら、需要は増大した工業人口によって代表されるからである。この場合、われわれは種々の変異を無視してきたのだが、工業の発展の影響の下では穀物価格がなお一層上昇することがわかる。

さて今度は、農業で不足している労働者数を外部から補充するということ——この場合、どんな方法でそれをするかはどうでもよいことである——を仮定しよう。そうすると、もし耕地面積および農耕の集約度が同じであるならば、五〇万トンの市場供給が一二〇万人の市場需要と相対することにな

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(三) (大藪・鈴木)

る。供給は変わらないが、需要は増大する。同時に人口の増大がおこるが、この増大は穀物価格の上昇の原因ではなくて、逆に、この上昇によって条件づけられたものである。

一つの重要な契機が、この場合を以前の場合と区別する。すなわち、ここでは穀物価格の上昇を説明するのに、労賃の上昇を考慮に入れる必要はない。農業労働者の賃金は、もし流入してきた労働者がより少くしか要求しないとすれば、下がることすらあり得る。そして、この農業の労賃の低下は、もし労賃の切り下げによって農業労働者の一部が工場に流れらるなら、工業における労賃の低下をもたらしこともあり得る。実際の発展も同様になされた。

われわれにはまだ最後の媒介項、すなわち、農民層 (the Bauernthum) が残っている。彼らは二重に考慮される。第一に労働者創出の源泉として、だが、その点に関しては、事情はすでに述べた通りである。違いはただ次のことにある。すなわち、農民層からの農業賃金労働者の補充の際には、人口の増加は全くおこらないということである。第二に、農民は独立した農業生産者として考察される。

後者の点に関しては、次のこと、すなわち、農民層は同じ

種類のものではないということに注意すべきである。とりわけ、アメリカの農業者層(Farmerium)は全体から区別せねばならない。彼らは一つの発展を経験し、資本主義的植民地という条件の下で生産をした。したがって、別の関連において説明されねばならない。ヨーロッパ大陸の農民は、そこでは資本主義的地代の法則が土地価格の形態であらわれているので、資本主義的な地主と同じ経済条件の下で生産している。彼が奉公人や日雇人を雇っておれば、彼は工場への労働力流出により地主と同じように影響をうける。彼には、穀物供給を拡大するための一般的な資本主義的手段のほかに、とくに一つだけ自由でできるものがある。それは自からの需要の制限である。しかしながら、彼は、穀物価格の上昇によってその方向に誘引されることはほとんどなく、逆に、販売者として他のすべてのものと同様に、そこから利益を引き出すのである。それゆえ穀物価格が下落するその時になってはじめて、ヨーロッパの農民層の競争は激しくあらわれる。

工業の発展が穀物価格に与える影響は、穀物価格および地代の形成の一般法則を止揚しはしない。この法則によれば、最も悪い自然的条件にある穀物の生産費が——もし、その生

産が需要を満たすために必要であれば——穀物価格の形成にとって規定的となる。つまり、需要によって制限された枠内では、一般的な価格形成および地代の法則が有効である。しかしながら、資本主義的市場においては商品需要のみが有効である。これは一般的なことであり、この点では農業生産物はすこしも例外ではない。かくして、穀物に対する資本主義的な市場需要を規定する諸要因が、穀物価格の形成にかかわってくる。なぜなら、それらは穀物生産の最下限の確定に影響するからである。

これらの規定要因は、需要と供給の諸要因と全く同様に、競争論に属し、『資本論』のプランの外に脱落しているので、K・マルクスによって特別には展開されていない⁽³⁾。しかしながら、いま明らかにした市場価格形成の一般法則と、穀物価格および地代の形成に際してのその作用とは、彼によりいろいろな諸関連において鋭くかつ明確に明らかにされている。ここに、農業にとって最も注目すべき箇所をあげよう。

「地代、したがって土地の価値は、その独自の耕作地地代について言う限り、土地生産物に対する市場したがって非農業人口の増大とともに、つまり、一部は食糧の、また一部は

原料の必要および需要とともに発展する。農業人口は、非農業人口のそれに比して、絶えず減少するということは、資本主義的生産様式の本性からくるものである。なぜなら、工業（狭義の）においては可変資本に対する不変資本の増大は、可変資本が相対的には減少するが絶対的には増大することと結びついているが、一方、農業においては一定の地片を利用する

ロンドンからの距離	価格, ペンス		
	パン	バター	チーズ
50(イギリス)マイルまで	1½	6¾	4
50—100マイル	1½	6	3¾
100—200 "	1¼	6	3¾
200—300 "	1	6	3
300 マイル以上	—	5	2½

のに必要な可変資本は絶対的に減少し、したがって、新しい土地が耕作される限りにおいてのみ増大することができるが、これはまた、非農業人口のより大きな増加を前提とするからである。⁽⁴⁾

工業発展と穀物価格上昇とのこのような関連は、一国全体への一般的な作用においてはじめて究明されねばならないものであるが、限られた地域における個別的な作用をとり扱っただけでもひと目でわかる。つまり、どの大都市でも一定の範囲の中で生

バルルス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

活資料が高騰していることが認められる。もちろん、運輸手段と海外貿易の発展はこの作用を相殺する。以前においてこの作用がどれだけ大きかったかを、アーサー・ヤング(Arthur Young)が彼のイギリス旅行記(一七六三年)にあげている上掲表が示している。

	小麦	ライ麦	食用豆	ジャガイモ	牛肉	バター
ベルリン都市区域	13.5	11.7	35.0	4.7	125	234
ブランデンブルク州	13.5	11.5	26.7	3.7	119	214

この対応が今もなおなくなっていないことは、次のベルリンとブランデンブルク州の価格の比較をみればわかる(キログラム当りペニヒ、一八九四年)。

諸都市の場合と同じように⁽⁵⁾、この関係は同国の互いに異なる地方の比較においてもみられる。ロート、ベルトスは、彼の第三の「社会的書簡」の中で、他の目的のためではあるが、一八一六—一三七年のプロシヤの各州における穀物価格の一覧を示したが、それは価格差をきれいにあらわしている。われわれは、この表をここにかかげ、それに相応する一八九四年の統計をつけ加えよう(次頁表)。

この国がこの四分の三世紀になしとげた巨大

州	ライ麦価格 1816-1837 シェッフェル当り	ライ麦価格1894 トン当り
ポ ー ゼ ン	34.3グロッシェン(銀貨)	109 マルク
シュレージエン	38.0 "	113 "
ブランデンブルク	38.4 "	115 "
ボ メ ル ン	38.4 "	114 "
ザ ク セ ン	40.3 "	120 "
ヴェストファーレン	47.75 "	125 "
ライ ン ラ ント	49.4 "	123 "

うなより大きな地域の農産物価格の相異なる高さは、何より
もまず、工業の発展の作用とみることができる。たとえば大
ブリテンとシベリアなどを比較する場合はそうである。(6)

一国全体の発展における農産物とくに穀物の価格の上昇は、
次のような理由から、工業の発展の作用として統計的に証明

な生産の発展と交換の発展にも
かかわらず、以前同様、最も高
い穀物価格を示しているのは最
も工業的な地方、すなわちザク
セン、ヴェストファーレン、ラ
インラントであることがわかる。
より大きな地域、たとえば国
全体の相互の比較は、最大限の
注意を払ってしなければならな
い。なぜなら、ここでは価格形
成の際に数多くの他の相違点が
共に作用するからである。もし、
それらの国の間で工業の格差が
非常に大きい場合には、このよ

することはむしろかしい。

- (1) 穀物価格は、年々、そしてもっと長い期間においてさ
え、収獲の結果に高度に影響されるため、
- (2) 外国からの穀物輸入が国内の穀物価格の形成をかく乱
するため、
- (3) その際、価格形成および貨幣流通の一般法則の作用が
切り離されねばならないであろうから、

- (4) 穀物価格の上昇は、すでに前の説明で示したように、
穀物生産の不足が相対的に高い生産費を促進する時には
じめておこるが、これはいつでもおこるとは限らないか
ら。

しかしながら、工業の発展の穀物価格上昇への作用が非常
に強烈で、この上昇を他の原因では説明できないような時期
がある。それは一八世紀末と一九世紀はじめのイギリスにお
けるような場合、つまり、偉大な発明がなされ、資本主義的
工業がその最初の発展段階を形成する時代である。

一八世紀中葉まで、イギリスは穀物のめざましい輸出をし
た。イギリスのある文筆家は、一七三九年の後に嘆きの声を
あげた。「もし外国への販売がなかったら、地主はどうなる

「であるか?」。その転換、すなわちイギリスの穀物輸入国への転化はあまりにも急激におこったので、これらの諸関係の解明は単なる人口の増大によつてはもとも不十分でないことがわかる。一七六三年と一七六四年には、イギリスはなお八二万クォータの小麦を輸出していたが、一七六七年と一七六八年にはすでに八三万クォータの輸入をしていた。その際、年間消費は約四〇万クォータと見積もられていた。

このような急速な変化は凶作のほつ発により促進された。しかしながら、それからはずっとイギリスは穀物輸入国にとどまるのであり、それは不作という偶然によつてはもはや説明できない。耕作面積および農耕の集約度はいまだなかつたほど増大したが、穀物輸入はイギリス農業の確固たる地位を保った。これは、穀物輸入が、絶

年次	ウィントン クォータ	チェスター タダ	スター・ タリ
1701年から1750年まで	35	シリング	9ペンス
1751 " 1764 "	37	"	2 "
1765 " 1795 "	49	"	10 "

対的ではなくて相対的な穀物不足によつて、すなわち、外国に対する価格差によつてひきおこされたことを示している。

価格の動きは次のようであつた(平均小麦価格)。

バルウス「世界市場と農業恐慌」(三)(大蔵・鈴木)

工業的發展の時期はそれまでに比べて大きな価格差を示しており、この世紀全体において例外的地位を占めている。

一七九三年にフランスとの戦争が始まり、それは一八一三年まで続いた。この戦争がイギリスの工業發展にいかなる作用をしたかは、ここでは詳述できない。だが、ヨーロッパとの貿易は、なるほど、しばらく非常な損害をこうむつたといえ、イギリスは同じ時期に海上で絶対的な支配権をもち、熱帯地方の諸国との交易を發展させたことを示しておけば十分である。一般的には、それは工業の發展の上昇期とみてよい。しかし、この時期がわれわれにとつて興味深いのは、この期間中にイギリスへの穀物輸入が阻害されたということである。これは、一つには、革命の混乱とそれに続く戦争の結果、外国の穀物に対するフランスの需要が急激に増大したためであり、次いで、全般的な戦争状態のために穀物に関するヨーロッパの輸出能力が全く減少したためであり、最後に、一八〇七年の終りからの有名なナポレオンの大陸封鎖の結果である。当時は、穀物の海外貿易は非常にわずかしか發展しておらず、北アメリカとの交易は、英米戦争の結果、非常に損害をうけていたので、ヨーロッパ大陸からの穀物の輸送は

常に増大するコストを伴っており、したがって、われわれの前には穀物価格に対する工業の影響を学ぶためには非常に恵まれた事例がある。

一七九三年から一八一三年の間、小麦価格は平均して八六シリング四ペンスであり、これは、その前の時期に対してさへ異常な上昇である。もちろん、この二年間には多くの変動がある。

穀物の高騰は、不作の作用が一般的な価格上昇に結合したその時に最も明らかであったにちがいないことは、明白な理由により、十分理解できるところである。この期間にはまた高騰から脱しようとする議会の努力もなされる。最初は一七九五年である。議会は高騰に対抗するために——以前には同じ目的のためにまさに逆の手段、すなわち輸出禁止が適用されたのだが——穀物に対する一定額の輸入奨励金を決めた。この輸入奨励金という措置はこの期間に何回もくりかえされた。

一七九七年は穀物価格の低落を示している。この低落は一七九八年まで続いたが、小麦価格はずっと五四シリングである。一七九九年には小麦価格は上昇し、一八〇〇年も同様で

あり、一八〇一年には一七八シリング六ペンスになった。一八〇二年には自由な穀物輸入が可能になり、その結果、小麦価格は著しく低下する。「パウル皇帝の死とコペンハーゲン戦役の後のデンマークとの講和は、バルト海の交易を再開させた。そして、奨励金と高価格の影響の下で大量の穀物輸入がおこり、それはこの年の間に小麦一五〇万クォータ、大麦一万四〇〇〇クォータ、えん麦六〇万クォータに達した。六月三〇日には小麦価格は一二九シリング八ペンス、大麦は六九シリング七ペンス、えん麦は三七シリング二ペンスであったが、かなりの豊作であったので、その年の終りには、それぞれ七五シリング六ペンス、四四シリング、二三シリング四ペンスとなった。フランスとの講和条約の調印などが輸入源の拡大と輸入コストの低下に貢献した。価格は前年の五月に対して五〇パーセント下がった。」

この低落傾向は一八〇三年にとまる。にもかかわらずこの年でさえ小麦価格は六〇シリング、つまり一七九八年より六シリング高く、われわれが算定した一七六五〜一七九二年の平均価格より一一シリング高く、そして、一八世紀前半の平均価格より二五シリング高い。かくして、工業の発展の結果

としての小麦価格の上昇は、いわば階段状に進み、その結果常により高い高原に進み、そこで他の原因の作用により価格の変動が生じたのである。単に後に続く期間の平均価格がより高くなるだけでなく、最低価格もまた高くなる。⁽⁸⁾

相対的な価格低下はたった二年間続いただけで、一八〇四年には再び上昇の動きがはじまる。ただ、一八〇七年は一クォーター当り八八から七八シリングへとわずかな低下を示す。この年の一月にイギリスに対する大規模な封鎖が始った。非常な貿易の困難にもかかわらず穀物輸入が中断しなかったことは注目すべきである。そして、一八一〇年には再び一五〇万クォーターの小麦の輸入がなされた。それは非常に価格が上昇した時期であり、この高価格が輸入の費用をあなうめした。一八一一年は例外的に相対的価格低下を示したが、それは、この時期に商業恐慌がおこったというところで注目に値する。

すでに述べたように、大陸封鎖はイギリスの工業の発展を阻止しなかった。それは、一方では熱帯諸国との貿易取り引きが非常に拡大したためであり、また他方では、とくに最初の数年は封鎖をうち破る手段と方法がみつけられたためであ

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

	羊毛 ポンド	糸 ポンド	棉花 ポンド	砂糖 ツェントナー
1888(1808?…訳者)年	2,553,725	637,102	43,605,982	3,753,485
1809	6,845,933	698,189	92,812,282	4,001,198
1810	10,936,224	1,341,475	136,488,935	4,808,663
1811	4,739,772	622,383	91,662,344	—

る。上の統計は、この工業の発展にべつを与える。

イギリスへの輸入額は次のようであつた。

一八一一年には増加の動きに逆転がみられる。熱帯地方の市場はイギリス商品で満たされ、その結果、後退がはじまり、ドイツの港では封鎖がより厳しく行われた(詳細はトゥックとニューマークを参照のこと)。小麦価格は年平均で一八一〇年に對し一八一一年には一一二シリングから一〇八シリングに下がった。それは、一八一〇年八月には一一六シリングで、一八一一年の六月の八七シリング二ペンスまで間断なく下落した。それからは、一

八一三—一八一四年に戦争状態の中断・貿易封鎖の除去・自由な穀物輸入の開始そして大きな商業恐慌がおこるまで、再び上昇した。小麦価格は一八一三年の一二〇シリングから一八一四年の八五シリングへと下落した。

一〇三(四六九)

年次	最低価格	平均価格	最高価格
1701-1750	22 シリング $\frac{1}{4}$ ペンス	35 シリング 9 ペンス	69 シリング $7\frac{1}{2}$ ペンス
1751-1764	29 " 11 "	37 " 2 "	44 " $5\frac{1}{4}$ "
1765-1792	36 " $2\frac{1}{4}$ "	49 " 10 "	59 " $1\frac{1}{4}$ "
1793-1807 ⁽⁹⁾	36 " $6\frac{1}{4}$ "	77 " 6 "	128 " 6 "
1803-1813 ⁽¹⁰⁾	49 " 3 "	108 " 2 "	120 " — "

上掲表は、この半世紀(一七六五—一八二三年)の上昇する穀物価格に關する一般的な概観である。

これはイギリス農業の黄金時代であつた。急速な工業の發展は穀物価格を上昇させ、それよりもさらに地代を増大させ、さらに地代よりも借

地料を増大させ、それに伴つて地価を上昇させた。耕作面積は拡大し、農耕は集約化され、大経営が急速に拡がった。地主には地代の形態で巨大な富がころがりこみ、借地農は大もうけをした。以後、これと同じような發展は一度もなかつた。それは、この時代のイギリスの工業の發展と同様に無比のものである。

しかしながら、この全栄光をもたらししたのは労働者階級であつた。パンの高騰にもかかわらず、彼らの貧しい賃金は少しも上げられなかつた。それがど

のような状態を生み出したかについては、K・マルクスとF・エンゲルスが示している。T・トゥックのような冷静な実務家でさえ、当時は労働者の窮乏は最もはげしく、労働者はほとんど飢餓線上にあつたことを認めるに違いない。しかしながら、賃金はそれでも少しばかり上がったので、トゥックは言っている。「かくして、飢餓のために死ぬ場合はまったくまれでしかなかつた。」

当時、国会議員は、労働者階級の飢餓を救うために彼らの家族のパンの消費を三分の一減少させるといふ、すなわち、肉と野菜にきりかえるという約束を果たした！さらに、小麦粉の消費を減少させるために髪粉に税金がかけられた。髪に粉をふりかける習慣はこのために消滅した。こうして、腹の減つた人民の目の中に砂をかけてごまかすことになつたのである！

このようにして、イギリスの工業發展は穀物価格の上昇を生み出し、地主が富裕になり、労働者階級が破滅し、イギリスは穀物輸出国から穀物輸入国に変わった。

農産物価格の上昇は工業發展の傾向であるといわれわれの理論的推論は、いまや、現実の展開によって証明せられた

と言つてよい。

その場合、われわれは相対的な消費すなわち人口一人当りの

	1821-1830	1870-1880
穀物収穫の年平均 輸出に対する輸入の超過分	44,542,527ツェントナー 200,000 "	74,132,009ツェントナー 7,800,732 "
合計	44,802,527ツェントナー	81,932,741ツェントナー
うち種もみ控除分 消費費用残 同人口一人当り	7,436,579ツェントナー 37,365,579 " 118.5キログラム	10,412,714ツェントナー 71,520,027 " 193キログラム ⁰⁰

の需要がわずかながら増大することを考慮に入れていなかつた。反対に、説明は、消費が変わらない場合における価格の上昇を示すことを目的とした。われわれは、イギリスの場合において、価格の上昇傾向は相対的な需要が減少する場合でさえも十分にあらわれうることをみてきた。

しかしながら、相対的な穀物消費が減少することは、決して工業発展の一般的法則ではない。相対的な消費が増大する時期もある。A・ド・フォーヴィル (E. France économique, 1889) は上掲のような計算を示している。もし、増大する工業の発展の

作用と消費の相対的な上昇がいっしょになれば、明らかに価格はそれだけ早く上昇するにちがいない。他方、消費の相対的減少は上昇に反対に作用するだろう。

農産物価格に対する工業発展の顕著な作用は、たとえばそれが価格の動きにあらわれなくとも、それが作用していることは明白なことである。もし、穀物価格が工業の全盛期が統いているにもかかわらず下落するならば、その時期の工業の性格が別のものである時には価格はもっと下落するであろうといえる。どんな運動も、その方向に作用する力の結果としてだけみなされるのでは決してなく、部分的には互いのうち消し合うような数多くの作用の結果である。だから、一つの作用をとり去るだけでも、たちまちその運動は変化する。

B 工業の発展が地代、借地料および地価に及ぼす影響

地代、借地料および地価の間関係は、カール・マルクスにより、その『資本論』第三巻においてあますところなく非常に明白に述べられている。したがってわれわれは、ごく簡潔に、われわれがとりあげるテーマとの関係において最も必

要と思われることを概括すれば足りる。

穀物価格(それとともに地代も形成されるのだが)が上昇する必要はない。地代は穀物価格が固定ないし低下しさえする場合においても形成されうる。

かりに一国の穀物生産の拡大が常により優等地が耕作されていくようなかたちで展開するならば、次のようなことがおこる。

もし、以前における最も劣等な土地がまだ続けて耕作されているならば、穀物価格は一定にとどまる。しかし、新しいより優等な土地と以前のより劣等なものとの間には(新しい土地における生産費がより少ないので)地代が生じる。

もし、より優等な土地が多く耕作されて、最劣等地が放棄されるようになれば、穀物価格は下落する。しかしながら、それでも地代は形成される。というのは、新しく耕作される土地はより古い土地種類よりもずっと良質だからである。

現実には、事情に応じて異なった種類の土地が耕やされていく。すなわち、ある時にはおそらく以前より劣等な土地が、ある時には最優等の土地が、またある時には中くらいのもものが、また、その効果もそれぞれの組み合わせによる。それら

の異った作用の下で、穀物価格はある時には上昇し、ある時には下落する。しかし、新しい土地種類が耕作されていく時はいつでも地代が発生する。すなわち、古い土地種類が新しい土地に対して地代を生ずるか、新しいものが古いものに対してそうなるであらう。

より大きな収穫をあげるためには、耕地面積を拡大するかわりに、同じ土地への耕作を集約化することも可能である。

この場合にも、穀物価格の上昇は不可欠な前提では全くない。需要を満たすために一単位(ツェントナー、ヘクトリットル、シエッフェルなど)の穀物を生産するのに、いずれかの土地により多くの生産費をかけねばならないような場合には、穀物価格はただ上昇するだけであらう。そうでなければ、穀物価格は同じにとどまるか、下落するだらう。しかしながら、もし異った土地種類における生産費の間に差異が生ずるならば、地代は依然として発生する。

われわれは、工業発展の結果による、穀物価格に対する市場需要の拡大に伴って、次のような必要性がおこってくることをみてきた。すなわち、

縮小された耕地で、以前と同じ穀物量を獲得するか、

または、縮小された労働量で以前と同じ耕地を耕やすか、または、減少する農業労働者の補充がなされる場合には、同じ土地でより多くの穀物を得るか、ないしは耕地面積を拡張するか、ということである。

これは、穀物価格の上昇を伴うこともあるが、そうでなければならぬということではない。とはいえ、これらすべての場合において新しい地代が形成される。しかし、なお依然として、異なる質の土地と異なる地代との関係がお互いにとのようなものになるかということ、すべての土地の地代総額 *die Gruntrentensumme* (バルクスはこれを「総地代 *das Rental*」と呼んだ) がいかなる大きさになるかということは、不確定のままである。

もう一つの問題は、このような影響のもとで一定の質の一定の地片の地代はいかにして形成されるかということである。もし、この地片の土地の質がすべての部分において同じなら、地代を生産物の単位当り、量たとえば一ツェントナー当りの穀物に対する比率において計算すれば——または計算を耕地面積(ヘクタール)にしたがってするが、投下資本に比して、(マ

バルクス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

ルクスはそれを「地代率」と呼ぶ)するならば——この地片の穀物収穫の増大が相対的に少ない生産費と資本を要するのでないことを前提にした場合、もちろんその時には、地代は穀物価格が上昇すれば上昇するだけである。しかし、この結果は上述の計算方法の場合にのみ得られるものである。だが、地代は投下資本との関連なしに単純に一ヘクタール当りで計算されており——それは通常なされ、また、合理的なことだが——そうすれば、地代の上昇は穀物価格に依存するばかりでなく、収穫量すなわち穀物生産量に依存する。この要因は非常に重要であり、したがって、くわしく論ぜられねばならぬ。

われわれは耕作されている一〇〇ヘクタールの土地を仮定しよう。穀物の収穫はヘクタール当り六〇〇キログラムとする。したがって、合計六〇〇メートルツェントナー(一六万キログラム……訳者)である。生産費は六〇〇〇マルクに達する。投下資本は六万マルクとする。五パーセントの利潤率の場合、その土地は三〇〇〇マルクの利潤を生ずるはずである。六〇〇〇マルクが生産費十三〇〇〇マルクの利潤は合計して九〇〇〇マルクである。もし、穀物価格がツェントナー当り二〇

マルクになるとすれば、この地片からの穀物の総価値は一万二〇〇〇マルクになり、三〇〇〇マルクが地代として残る。つまり、ヘクタール当り三〇〇マルクの地代となる。メートルツェントナー(一〇〇キログラム……訳者)当り地代は五マルクとなる。そして、投下資本に対する地代の関係、すなわち、地代率は $3,000:60,000$ ないし、ヘクタール当り $30:600$ つまり五パーセントである。

今度は、資本を二倍にする場合には生産費が二倍になり、そのことによりこの地片の土地収穫を二倍にできるものとする。そうすれば、生産費は一万二〇〇〇マルク、資本一二十万マルク、利潤は、五%の場合には、六〇〇〇マルク、収量は一二〇〇メートルツェントナーとなる。すると、穀物の生産価格(利潤を加えた生産費)は一メートルツェントナー当り、 $(12,000+6,000):1,200=180:12=15$ マルクである。穀物価格がツェントナー当り二〇マルクで変わらない場合、地代としてはツェントナー当り五マルクであり、以前とまったく同じ大きさである。しかし、この地片の総地代は、今度は五マルク $\times 1,200=6,000$ マルクになる。これは、ヘクタール当り三〇のかわりに六〇マルク、すなわち、耕地面積当りで計

算すると、地代は穀物価格が不変であるのにもかかわらず二倍になる。これに対して、地代率は今度は $6,000:12,000$ つまり五パーセントであり、変化しないままである。

収穫を増大させるためには、より多いかまたはより少ない生産費と資本が投下されねばならないことにより、また、資本と生産費の関係によって、あまたの変異が生まれてくるだろう。この変異は次のように総括される一般的な法則を変えない。すなわち、いかなる穀物収穫の増大も、土地面積当りで計算された地代を⁽¹⁾上昇させる。ただし、その場合、収穫の増大が生産費の増大と結びついていて、このような追加的資本投下が、それについて計算された平均利潤率とともに、そこに形成されるであろうところの新しく得られた穀物量の全価格差を消滅させるという唯一の場合を除かれる。⁽²⁾

一国全体の種々の地代の総額(総地代)を考えれば、この総額、すなわち、この国の総地代は、単に地代の形成と上昇の法則ばかりではなく、この国の耕地が量的に、いかに種々の土地種類から成っているかということに依存している。もし、この耕地面積が、土地の約一〇分の一まで何ら地代を生まない最劣等地から成り(我々は、叙述の簡單化のために絶対地代と最

劣等地の地代を全く無視する)、一〇分の九だけが地代を生む土地から成っているとすれば、地代総額は、明らかに、この關係が逆の場合、つまり、土地の一〇分の一だけが地代を生む場合とは異つたものとなるだろう。ヘクタール当りの地代が同じであれば、九ヘクタールは一ヘクタールの九倍をもたらす。この違いは、もちろん、同様な仕方での地代の変動についてもあてはまるだろう。

したがって、もし、一人の地主が種々の土地種類の複合した土地をもっているなら——それはごく普通にあることだが——彼の土地所有から生まれる総地代は、再び一ヘクタール当り平均で計算されるならば——ただし総平均で——種々の土地種類での地代の高さだけでなく、彼の土地所有がそれぞれどのような土地種類から量的に構成されているかに依存する。つまり、個々の地主にとっては、彼の土地所有の中で耕作面積をより優等な土地に拡大することが常に有利である。なぜなら、これらの優等地は彼により大きな地代をもたらし、それによって、彼の土地の総地代を増大させるからである。しかし、地主階級全体にとっては、たいいていの場合には反対のこと、すなわち、より劣等な土地の耕作が進展することが有

バルルス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

利である。なぜなら、その結果、穀物価格が上昇し、それにより地代総額の上昇が条件づけられるからである。こうして、個々の地主の利益は階級としての独自の利益に反対に作用する。

一方、一国の地主達にとっては、単に地代の高さが決定的であるばかりでなく、豊度に関しての土地の量的な分化も重要である。したがって、もし、相変わらず劣等な土地が耕作されておこなながら、同時に、最劣等地が生産の拡大にあずかることが相対的に最も少いならば、彼の所得は最も多く増大する。

こうして、穀物価格の高さでも地代の高さでもなく、総地代の大きさが——それは一国の総地代としてであれ、または一定の土地の複合体に対する借地料としてであれ、これらすべての作用が統一されているのだが——地主の利益の中心を示すものである。この総地代は次のものによって増大する。

穀物価格の上昇によって、
地代の上昇によって、

種々の質の土地からなる耕作面積の構成がより有利に進展することによって、

工業の発展が、穀物の市場需要の増大を通じて、これらす

べての要因に対して促進的に作用するということは、ことさらに証明する必要はない。

他の影響が作用するので、工業発展の影響の下で穀物価格が上昇しない時でも、地代を増大させ、また、総地代を拡大する多くの原因がある。むしろ、地代と総地代を増大させるまさにその原因が、往々にして、穀物価格の上昇を阻害する

のである。しかし、もしすべての要素がともに同じ方向にはたらくならば、総地代はきわめてはつきりと増加する。そして、それにつれて、もし一国の平均で計算するか一地方の平均で、あるいは一つの土地複合体の平均で計算するならば、借地料は上昇する。

このような諸関係に注目する時のみ、今世紀七〇年代におこった借地料およびそれに伴う地価のともつもない上昇を理解できる。その上昇は穀物価格の上昇をはるかに超えるものであり、時として、穀物価格の上昇と全く異ったものになる。

コンラッドは、彼の『国家学小辞典』で、プロイセンの直営御領地における一八四九年以来の借地料の上昇に関する興味ある表を示している。われわれは、それと並べて、五つの時期(一八四〇—五〇年、一八六六—七〇年、一八六七—八〇年、一八八六—九〇年)について、同一期間におけるライ麦価格の動き、および、現在のドイツの人口(一八五〇年、一八七〇年、一八九〇年)の増大に関する概観を示そう。そうすれば、上掲表のような一般的

行政区域	1ヘクタール当り借地料 ⁽³⁾ の上昇			
	1849	1869	1879	1890/91
ケーニヒスベルク	100	208.8	274.0	285.6
グンピンネン	100	205.5	231.4	257.1
ダンチッヒ	100	235.2	277.8	252.1
マリエンベルダー	100	240.0	344.4	374.0
ポーゼン	100	215.9	255.6	260.0
ブロンベルク	100	236.5	262.6	251.7
シュテッティン	100	192.2	216.3	225.2
ケスリン	100	204.5	281.2	235.2
シュトラルズント	100	267.8	281.7	266.4
ブレスラウ	100	177.9	248.4	323.7
リーグニッツ	100	174.1	304.7	310.5
オッペルン	100	173.8	271.6	354.4
ポツダム	100	234.5	296.6	298.1
フランクフルトa.O.	100	192.5	250.1	260.7
マグデブルク	100	175.7	289.0	338.5
メルゼブルク	100	128.0	189.4	238.1
エアフルト	100	135.4	179.2	163.0
平均	100	224.3	256.3	280.2
ライ麦価格の上昇 ⁽⁴⁾	100	131.0	128.0	109.0
ライ麦価格の絶対額 (トン当りマルク)	130	170.0	166.4	142.0
ドイツ人口の増大	100	115.0	125.0	140.0

概観を得る。

見られるように、借地料の非常な上昇は、ライ麦価格の動きや人口の増大とは全く何ら比例していない。プロイセン全体の資本主義的土地所有における諸関係も同じように進展したに違いない。これは、地主階級が自分の土地を貸すか自から経営するかを問わず、彼らの非常な富裕化と地価のとてもつもない上昇を意味する。しかし、何がこのような結果をひき起したのだろうか？ それは、第一に工業の発展である。

われわれは、場合によっては借地料の上昇をよびおこすようないくらかの特別な原因になお言及せねばならない。それは、今後の叙述にとって重要である。

借地料は、借地人がより少い利潤で満足すれば増大しうる。これは、零細な借地人、たとえば農民が問題である時には明白である。農民は他の生存の可能性を全くもたない。その結果、彼は、他により安く土地を借りる方法がなければ、借地料の増大を極限にまでおし進めるに違いない。しかし、資本的大借地人にも、彼の利潤を減少させる原因がある。もし借地が彼からひき上げられれば、彼は資本の投資先がなくなる。彼は今度はどこか別のところにそれを投資する先を、さ

がさねばならない。それは困難と損失を伴なう。もし土地所有者自身が経営しておれば、彼にとっては、もちろん、この致富の特別な手段はなくなる。

借地料は、農業労働者の賃金が減少することによつても上昇しうる。それによつて、どの資本主義的企業においてもそうであるように、必然的に地主が借地人から特別利潤をまきあげる。もし彼が自分自身の借地人であるとしても同様である。しかしながら、工場主が賃金を下げるのか、地主がそうするかということには違いがある。その理由を示そう。

地価は、資本利子が下落するという理由からものはつきりと上昇する。この資本利子の下落は資本主義的生産の発展法則である。

この研究は、なにかんづく、農業の発展が種々の要因の複合であることを示してきた。したがって、穀物価格の状態のみから農業の状態を判断するのは誤りである。さらに、価格を上昇させることのみをめざしている農業政策は、農業の破滅をもたらすこともあり得る。

だが、この時点でのヨーロッパ農業の状態はいかなるものであったか？ 農業恐慌が存在するのか、それともそれは単

なる幻影か？ たしかに農業恐慌は存在しているし、それは依然として厳しく深刻になっている。そして、それは単に借料と地価の下落および耕地面積の縮小によってばかりでなく、資本主義的競争の法則が一見逆転することによって特徴づけられ、その結果、場合によっては、農民的分割地経営によって資本主義的大経営がある程度崩壊することすらあり得る。そして、それは昨日に始まったことではない。また、それはアメリカの発見の苦い結果がおくられて出てきたものではなくて、資本主義的生産の不可避的な結果である。

工業の発展が、いかにして地主を富裕にしながら、その破滅をもたらしたかが説明されねばならない。

それが、われわれの解き明かすべき次の課題である。

(注)

六 工業と農業

A 工業の発展が穀物価格に及ぼす影響

(1) 二つのことが世界経済の現実的發展の研究を困難にする。第一に、われわれは、いつの場合でも互いに異なる發展段階と發展類型をとりあつかわねばならないこと、第二に、これらの個々の差異それ自身だけを認識することはできないこと、なぜなら、それらには資本主義的生産の一般法則があてはまるからである。したがって、抽象化により、その特殊性から一般的な諸

関連を明らかにし、その後、発見された法則を基礎にして、その特殊性を説明することが必要である。カール・マルクスは、彼の『資本論』において、前者の課題を徹底的に解決した。彼はまた、そこおよび他の著述で、個々の形態と個々の發展のすばらしい展望を提示している。フリードリッヒ・エンゲルスについても同様である。しかしながら、ここで多くのことが手つかずになっており、多くのことが両者によってなお全く解明されていない。なぜなら、まさに絶えず変化する生命を解き明かすことが必要であるからである。理論は精神を無用のものとするのではなく、それを強化し、それに新しいたたかいへの準備をさせるのである。

(2) このような表現は非合理的である。なぜなら、一方では穀物量を、他方では人口数をとり扱っているからである。正しい表現は、市場にもちこまれる価値と需要される価値との比である。しかしながら、合理的な概念に変えることは計算を必要以上に複雑化させるであろう。

(3) それは、したがってまた、現在まで手がつけられていない領域である。数年来、「オーストリア学派」の若手がこの分野でいろいろと試み、彼らの顔に汗して何らかの成果をあげようと努力している。彼らが政治経済的法則として明らかにしているものは、不名誉な教授がこの世の苦難を気持ちよくしのぐために手にした哲学ではない。彼は一着のオーバーを買うお金も持っていないので、それでも、満腹でオーバーなしで歩き回る方が、空腹で新しいオーバーを着て自慢するよりもよいのだ、と屁理屈を言う。そして、資本が要求すれば、ちょうど自分の

古いオーバーをかえるのと同じように、気安く主張をひるがえすのである。

資本主義の市場関係は、社会的諸関連、すなわち、生産内部の経済的階級構成・社会的分業・全体的社会構成・生産諸力の発展・とりわけ世界市場の発展、等々から生ずるような社会的諸関連によつて条件づけられている。それらは、他方において、部分的には市場関係によつても条件づけられている。なぜなら、生活は弁証法的過程なのであるから。

この領域の研究がいかに重要であるかということは、それをなしとげて初めて、恐慌の完全な理論がうちたてられるであらうということからすでに明らかである。

(4) マルクス『資本論』第三卷、第二部、一七七頁。

(5) 都市は、資本主義的農業の発展を説明する際には、単にその工業的性格のために顧慮されるのではなく、また単に非農業人口の集団としてのみでも全くなく、市場の集中心(チ、ュー、ネン)の農耕様式分布の理論)としてである。このような考察は、しかしながら、この研究の計画では別の関連に属している。

(6) 工業の発展段階が互いに非常に異なる個々の国々における生活手段の価格の差違は、一国の各地域の発展段階ごとの価格差と同様に、ロート、ベルトスをして、その際に重要なのは一般的な資本主義的諸関係であるという推測をなさしめている。その説明として、彼はまず第一に都市の成長をあげている。しかしながら、彼はその影響を市場の集中という意味においてのみ把握する。生活手段は遠く離れた地域から供給されはされるほど高くなるに違いない、と。しかし、それは次のことを言つて

バルウス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

いるにすぎない。生活手段は、それが多く、費用がかかるがゆえに、すなわち、より高くつくがゆえに、より高く販売され、したがつてより高い価格をもつのだ(?!)。と。だが、問題はまさに、いかにして生活手段を相対的に高い価格で販売することが可能となるかということである。

彼はこの説明の不十分さを感知して、もう一つの理由をあげる。それは、農業労働者における、現物賃金から貨幣賃金への移行である。貨幣賃金の普及とともに市場需要が増大する、と。しかし、そこですぐにそれを取り消すような反証に注意を向けさせる。すなわち、現物賃金から貨幣賃金への移行により市場需要が増大するにつれて、今度は以前に現物で支払われていた生産物が市場にあらわれるので、市場供給もまた増大する、と。彼は完全にこの矛盾にまきこまれ、与えられた条件とは何の関係もない副次的なものに目を向けさせる。こうして彼は、たとえ、価格は需要が「数千にも細分化する」がゆえに上昇するなどと考え、真理は逆であり、集中された需要が価格をつりあげるのである。さらに、事実の上でも、貨幣賃金への移行によつて需要が「細分化する」というのは全く正しくない。

最後に、彼はもう一つの理由をあげる。すなわち、「貧乏な」諸国における貨幣の騰貴である。彼は、たとえ貨幣金属の生産費が同じでも、「豊かな」、つまり資本主義的により発達した諸国においては、世界貿易によつて相対的に急激に貨幣が流入する結果、「現存する商品量に対する現存する貨幣量の比が相対的に大きくなる」ので、貨幣は相対的に安くなる(したがつて商品は高くなる)、と言ふ。事実の前提が誤っているが、一般的

理論的な関連もまた完全に誤りである。なぜなら、貨幣流入によつて、生産と商品流通はなお一層高度に拡大しうるからである。このことは、資本主義的生産の発展においては、非常によくあることであり、前資本主義的社会は相対的に少い貨幣金属量でやつていけるが、資本主義社会においては、絶対的にばかりでなく相対的にも金属貨幣のぼう大な増加にもかかわらず、信用のなお一層の発展にもかかわらず、また、類例のないほど急速な貨幣流通にもかかわらず、金属貨幣を紙の表章（銀行券）におきかえる必要性がおこってくるのである。

ついでに言うならば、ロートベルトスは、彼のリカード地代論批判において、彼がリカードの理論の補足および深化の必要性を示しているにすぎないのに、それをつきくずしたと信じている限りにおいて誤っている。彼自身の理論がまさに一面性と不十分性におちいつているのである。

(7) T・トゥック、W・ニューマーク『物価史と物価の決定』参照。C・W・アッシャーによるドイツ語訳第一巻、三五頁。以下のイギリスの数字も、注記のない限り、この基本文献からとられたものである。

(8) この独特の階段的穀物価格の上昇を、T・トゥックが掲掲の彼の物価史において概観している。彼は年々の価格変動を分析しているが、それが常により高い高原にあることは指摘していない。彼は、とりわけ、もっぱら収穫の結果の穀物価格への影響を証明しようとして、ある時は前年の収穫により、ある時は当年の収穫の結果、または翌年の収穫見通しにより推測している。彼にとつては、この証明をすることは、われわれの時

代にルドルフ・ファルプ氏が雨が降るか天気になるかを予想することが容易であるように容易なことである。

(9) 戦争の開始から大陸封鎖まで。

(10) 大陸封鎖の時代。

(11) この場合、穀物の工業用仕向けが増大が考慮されるべきである。

B 工業の発展が地代・借地料および地価に及ぼす影響

(1) ロートベルトスはそのことを知っていた。「地代が分配されるモルゲン数は、地代の増大と同じ割合では増加しない……つまり、地代の増大によつて、地代と地代が分配されるはずのモルゲン数とのこれまでの比率も、もちろん、変化する。なぜなら、後者には、いまやこれまでより大きな地代額がもたらされるからである。」「第三の社会的書簡」、二二六頁)

それから、ロートベルトスはさらに二二三頁できわめて正当にも次のように展開している。すなわち、同じ理由から、平価の切り下げは地代の名目的な増大をともなうにちがいない。と主農派は、これを銀本位制によつて追求する。もちろん、それは無意味のようである。なぜなら、重要なのは銻貨の上の数字ではなくて、商品交換におけるその価値にあるのだから。たとえ、一〇〇マルクの金の地代が一二〇マルクの銀の地代に「増大する」としても、後の一二〇マルクで以前の一〇〇マルクと全く同じだけのものを買うことができるにすぎないとしたら、何のどくになるのか？ しかしながら、この貨幣の幻影のうしろにはきわめて現実的な利益がひそんでいる。われわれは次章

で投機を白日の下にさらすであらう。

(2) 個々の場合についてはマルクスにより、そして一部はエンゲルスにより、「差額地代Ⅱ」において探究されている。

その際、エンゲルスによって書かれた挿入文については次のことを注目すべきである。すなわち、フリートリック・エンゲルスが、彼の一般的な総括において、「土地A(最劣等地)が競争から除外され、土地B(次のもの)が規定的に、したがって地代がなくなる」場合のみ、第二の資本投下(ないし穀物生産の拡大)は総地代を増大させない、という結論を引き出す時、それは、なるほど、彼の出した数字例からは生じるが、一般的な諸関係の必然的な結果では全くない。ひとは、個々の場合の与えられた仮定を少しも害することなく、全く逆の結果をもたらすような別の数字を示すことができる。

したがって、彼が後にこの結論を次のような一般的な命題に集約するのは全く誤っている。すなわち、「かくして、土地により多くの資本が投下されればされるほど、また、ある国において農耕と文明の発展が高ければ高いほど、それだけ一層エト、カ、当りの地代は地代総額と同様により多く増大し、また、社会が超過利潤(Surplus-Profiten)の形で大地主に支払う貢物は巨大なものになる。ただし、これはひとたび耕作された土地種類はすべて競争力を保持しているという限りに、おいてである。」(第三巻七七三―四頁、訳者)

この部分で非常に奇異の感をいだかせる表現の不正確さは別としても、これは以下の限りにおいて誤まりである。つまり、すでに述べたように、諸々の土地種類が依然として「競争力を

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(三)(大藪・鈴木)

もつている」にもかかわらず、地代とその総額(地代と総地代との混同は完全には克服されていない)が新しい資本投下の際上昇しない場合が存在する限りにおいてである。ここで詳しく計算してみせることは余計なことにならう。だが、簡単に理論的関連を明らかにしておこう。

一定の土地に対する新しい資本投下は、何の特別利潤を生じないでもなされうということ、確かに一般的な仮定である。そのためには、一般的な平均利潤に相応した資本の通常の利子が生ずることを考えれば十分である。ここで、任意の等級の地代をもつ土地種類を好きだけとつてみよう。さらに、どの土地種類においても、新しく投下された資本にちょうど平均利潤をもたらし、特別利潤は何ら形成させないような穀物生産の拡大のみが生ずるものとしよう。そうすれば、もちろん、この新しい資本投下は地代を生まず、新しい地代形成の総額も同様にゼロである。かくして、地代とその総額の上昇は全くない。しかし、だからといって、「耕作されている土地種類の競争力」に何らかの変化がおきたらどうか? 全くおきていない! これらの土地種類が以前にお互いの関係において生み出していた地代は今も残っている。地代は、新しい資本投下が何の地代も生み出さないというような状態によって影響されない。なぜなら、エンゲルスが上述の箇所でも述べているように、「絶対的な収量ではなくて、収量の差違だけが、地代にとっては決定的である」からである。最劣等地Aは以前にはたとえは一〇ブッシェル生産し、土地Bは一五ブッシェルであったとする。土地Bの地代は二ブッシェルだった。今度は、資本投下の拡大に

一一五 (四八一)

より土地Aは二〇、それから土地Bは二二ブッシェル生産するものとしよう。土地Bでの新しい一〇ブッシェルは何の地代ももたらさず、今度も、 $\$1-\2 ブッシェルの地代という以前の差異がなお存在したままである。以前と同様に、土地Aがなお一般的生産価格を決定し、すべての土地種類は「競争力がある」ままである（「競争力がある」という表現はエンゲルスによっても非常に独特な方法で使われているのだが、われわれはその簡便性のゆえにそれに従ってきた。）。

- なお先に進んで、場合によっては、「ひとたび耕作された土地種類がすべて競争力をもっている」にもかかわらず、生産の拡大によって地代が減少することを証明できる。しかしながら、それには、マルクス自身が差額地代Ⅱからひき出した結論が、たったいま批判したエンゲルスの主張と全く対立するということを示せば十分である。（第二卷二六二―二七〇頁参照）

- (3) つまり、「利用可能地」に分割された総地代。
 (4) 一八七六―一八八〇年と一八八六―一九〇〇年は『小辞典』の穀物価格による。一八四六―一八五〇年および一八六六―一八七〇年は官庁統計より筆者が算定（「シユッフエルのライ麦Ⅱ四〇キログラム）。

共同研究室

昭和五十年第四回研究会（七月四日）

▼テーマ 県民所得統計発展の現状と問題点

報告者 後藤文治氏

報告要旨

一 はじめに

報告者は、さきに「県民所得統計の発展と県民所得標準方式」と題する研究ノートを本誌の左記各号にわたって掲載した。

（本誌巻号）

（研究ノートの章別）

第十八巻第五・六号 序章、第四章

第十九巻第四号 第五章

第二十巻第四号 第六章

第二十三巻第四号 第七、八章（結言）

今回の研究会報告は、右記の研究ノートのあとを受けて、県民所得統計の発展の経緯と現状について紹介するとともに、その問題点について論述することを目的としたものであった。しかしながら、本報告においては、報告テーマの内容の上